

## 清水登之日記「略誌」(1907～1916) その2

伊藤 佳之

本稿は、昨年度『藝叢』第33号に寄稿した「清水登之日記「略誌」(1907-1916) その1」の続編である。「その1」に引き続き、日記を読む勉強会のメンバーを代表して、伊藤が本稿の執筆・編集を担当した。「略誌」及び勉強会の概略については「その1」をご参照いただきたい。

### [謝辞]

本稿執筆にあたり、前号と同様、当該資料を所蔵する公益財団法人大川美術館、ならびに清水登之長女の中野富美子氏に、投稿及び掲載のご承諾をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

### [清水登之日記 略誌]

凡例：

1. 書き起こしにあたっては、頁が変わるごとに(改頁)と記し、その番号を付した。
2. 勉強会で判読できなかった文字は「○」で記し、塗り潰しは「●」で記した。
3. 漢字は日記の記述をそのまま使い、旧字体と新字体の混在も可とした。かなについても同様。また表記の誤りと思われる箇所も訂正せずに記した。
4. 傍点、消線、囲み等がある場合は「■」(黒四角)で当該文字列を挟み、終わりの■の後に括弧で(傍点)(囲み)などと記した。
5. 縦書の繰り返し記号は「／＼」(スラッシュとバックスラッシュの組み合わせ)で示した。
6. 文字の挿入がある箇所は、挿入される文字を「＼」「／」(バックスラッシュとスラッシュ)で挟み記した。
7. 註は頁ごとにその末尾に記し、略誌全体の通し番号を付した。なお註には書き起こしの段階で付された事項に加え、勉強会の中で指摘された事項を「☆」の後に記した。

---

(改頁 27)

二人して兎も角十六丁歩の畑をやつて行かねばならぬ から馬の力を活用しなければならぬ 酒井氏のところから親馬一頭 仔馬頭<sup>(22)</sup>を分けて貰つて他より小柄の馬二頭を買入れた。親馬は老齢で使役不堪えられぬ程弱つてゐるこれは初めから豚の腹を肥やすため連れて来たのであるが仔馬も成長を見ず或る雪の晩畑の中へ斃れゐるのを發見した  
小柄の馬一對は 神圣過敏なやつで訓練もよく

(22) 仔馬は「一頭」か。

---

(改頁 28)

されてゐなかつたので 一寸でも目を外づしでもすると駈け出したり騒いだりして二人を随分困らすこともあつた  
此處は北へ約四キロにワツパト町を○へてはゐるが東隣りは果樹園になつて居り南道路をへだて、 廣島縣出身者／の開墾地西はキャンベルといふ欧州から流れ込んで来た中年の夫妻子供の畑 北は全じ園内 奈良縣、紀州出身の二人が吾々と全時に開拓した畑に取り囲まれ 静かな夜分などは寂しいところである

---

(改頁 29)

ワツパトとはインデアン語でポテトの意味である数千人の小さな町であるが食料日用必需品は充分間二合ふ。  
この町から西■北■(右脇に書込)方面約十キロ計りのところにノース・ヤキマ<sup>(23)</sup>といふ町があるが 此町は二三万の人口があり農産集積場■であり■(右脇に書込)特●にヤキマ林●檜の出荷頃は賑やかである 支那人の富豪榮昌といふのが居り 廣い農園や果樹園を至営して居り同胞も多数使はれてゐた 支那賭博場も数多く 切角汗水で得た金も一夜にて素裸と

(23) ワシントン州ヤキマ郡ヤキマ(Yakima)。

---

(改頁 30)

なる同胞もあつた  
此のレザーベーションは周圍余り高くない山に圍まれたところで道路は碁盤目に設けられ未開墾地も拓かれたところも八十エーカーづ、鐵條網で区劃されてゐる  
自動車など未だ普及されてゐない頃であるから二頭立の馬車が何處の農園にも用意されて只一の交通機関とされてゐた。  
此處から西南に雪を頂くレニア<sup>(24)</sup>。アダムス<sup>(25)</sup>等高山が眺められ 時に前途を悲觀したものである。

(24) Mt.Rainer レイニア山。日系人からは「シアトル富士」とも呼ばれる。

(25) Mt.Adams アダムス山。

---

(改頁 31)

この農園を聖営する時二人の金を合せても大したものではなく 蒔付け頃にでもなれば金ニ不自由して交替で附近の同胞農園へ手傳つたり 苗木屋へ働いたりした 苗木屋は本店が タップニシユにあり此處には同胞が多い頃数十名使はれてゐた。 ● ワツパの苗木屋はその支店である 主に果樹の苗を接木する仕事で手先の早い日本人が歓迎されたわけだ。支店長は背の短い至つて風采の上がらない ケレーと\いふ/男でよく仕事を覗きに來たりした 此職場で岩手縣水澤出身の阿部氏と知つた

---

(改頁 32)

同氏は余と全じ目的で渡米し此の小さな町ニ生活し乍ら シカゴ市からルーベンス。アングル。グリーズ。ワットウ。ヴェラスケズ。等の色刷複製の小型の本を取り押せて勉強してゐた 吾々二人の百姓生活は四十二年の一ヶ年を續けて一人前の農夫にはなつたものゝ豫想した貯蓄は出来なかつた 明治四十三年 九月初旬高木氏はワツパト

---

(改頁 33)

の町で聖営してゐる同胞の洗濯屋を引受けて百姓生活から足を洗つたので余一人居残つたが これから先一人ではどうすることも出来ず 間もなく高木氏の後を追ふて約二カ年近く 苦闘した 農園と住家に別れ 知人の勧めまゝに十八日 キヤスケード山麓 エーグル、ゴーチ<sup>(26)</sup>にある ソーミール(製材会社)へ入つた 余の職場は最も危険を供ふところで

(26) Eagle gorge (イーグル溪谷) か。シアトル南東、ノルテ州立公園の東約15km、レイニア山麓。

---

(改頁 34)

よく負傷したり死亡したりす 場所である 賃銀のよい割に危険であるので希望者はない有様だつた 何にも知らぬ余は 着早々この危険な職場へ働いたのである 就働して五日目に左腕へ負傷してキヤンプ迄擔ぎ込まれた 切断されることにでもなれ

ば将来どうなるかと病院へ着く迄心配したが タコマ市在 ファンニー、パドック病院<sup>(27)</sup>

(27) Fannie C. Paddock Memorial Hospital, Tacoma. 1882年開院。清水が治療を受けたときの住所は 312 S. J St., Tacoma. Multicare Health System 公式ホームページより。https://www.multicare.org/multicare-history/ (2018年12月17日最終確認)

---

(改頁 35)

へ着早々レントゲンで■見■(二重消線、その脇に「診」と書込)て貰つたところ切断する必要はなく二週間■位■(右脇に書込)入院して居れば全治する だろふといはれて一先づ安心した 此病院は製材会社附属の病院で殆んど 外科の患者ばかり入院してゐた 余の病棟には十八個ベッドが並べられてあり多くは欧州から流れ込んだ労働者によつて 占領されてゐた 入院してゐる間■非■(丸で囲み)比島人の青年と知り合

---

(改頁 36)

つて心持のよい日など町へ出で映画など見たものである 入院してから十七日目に退院十一月九日 エーグルゴーチを引上げ ポートランド筋のソペナ<sup>(28)</sup>といふところの鐵道 ギヤング、ボーイとして働いたが三週間許りで止め 十二月二日ワツパト市へ引返へし 附近の同胞聖営の農園へ傭はれた

(28) 該当する地名見つからず。

---

(改頁 37)

余の傭はれた農園は兵庫縣明石附近 出身の兄弟と同窓だつたといふ男と三人で共同経営してゐた 牧草は二百エーカーも澤山作つてゐたので 灌漑を必要とする時期ニは可なり多忙であつた ジャガ芋水瓜、甜瓜なども収穫時には 数人の同胞を傭入れなければ 手が回らなかつた 明治四十四年 大正天皇まだ皇太子

---

(改頁 38)

殿下に〇られし頃母校栃木中学校へ  
台臨あらせられ<sup>(29)</sup> 生徒の作品御高覧の際  
余の在校中 二年生の夏休暇にホワットマン  
半折へ着色複製から 米國のサンプソン  
將軍<sup>(30)</sup>の肖像画を 模写して 保管されたもの  
御目にとまり献上の光栄に浴したといふ  
知せが二月二十四日入手感激の餘り直ぐ  
にでも 美術学校へ飛び込んで勉強しな  
ければ申訳ないと思つた

(29) 日記の記述では明治44年となっているが、栃木県  
立栃木高等学校公式ホームページによれば、皇太子嘉  
仁親王(後の大正天皇)が栃木中学校を訪れたのは  
1910(明治43)年。<http://www.tochigi-edu.ed.jp/>(2018  
年12月17日最終確認)

(30) ウィリアム・トンプソン將軍(William Thompson,  
1736-1781)か。☆弟投鬼の回顧録には、「ピスマルク」  
の絵を献上したとある。(杉村)

---

(改頁 39)

明治四十五年 先年から引續いて農園生活  
七月三十一日 明治大帝崩御遊ばされ 大正と  
改元された 生れて初めて大きな悲しみに  
逢つた そしてともすれば忘れ勝ちの初期  
の目的が急ニ蘇生した 学資を充分に造  
つてから勉強しやうと言ふ心構へを変更して  
兎にも角くにも美術学校へ入つて終う そう  
すればどうにか生きて行く位は出来るだろふ  
と九月十五日 農園を去り桑港の美  
術学校へ入る決心で先づシヤトル市へ出た

---

(改頁 40)

余より先ニ沙市へ出で研究ニ余念のない阿部氏  
を訪問したところ 和蘭人畫家の塾へ通つて  
ゐるが 先生はレンブランドの流れを汲む大家でも  
あり<sup>(31)</sup> 親切に指導もして呉れゝる／から 桑港行を  
見合はして 此處で勉強して見るやう勧め  
られるまゝに 腰を据ゐることにした そして  
山縣出身の萩生田君<sup>(32)</sup>ニ紹介され同君の油絵  
やデッサン等見せ貰つたりした  
九月二十二日から待望画学生々活初まる

(31) フォッコ・タダマ(Fokko Tadama, 1871-1937)。

(32) 萩生田真吉。詳細不明。

---

(改頁 41)

全日 阿部、萩生田両君に誘はれて日曜写生  
クラスへ入へり先生と生徒合せて六人の少人数  
で ウェスト・シアトルへ出かけた 六号位のキャン  
ワ■(濁点)ス  
ボードへ写生した これまで模写位は油絵具  
で描いたことはあるが それも 正式は使用法は知  
らなかつた 兎に角描かせてためしてやろふ  
といふ先生の腹らしく 写生する態度についても  
色彩の扱方についても何一つ注意して呉れな  
かつた

小川の邊りに一抱へもある柳の古木を前景

---

(改頁 42)

に 中景へは 雑木の一塊を取り入れた  
萩生田 阿部両君は 手訓れたものでサツサと  
手捌きよくやつてゐる 羨しき限りであつた  
前景の雑草を一本々丁寧に描いてゐるの  
を先生不満であつたのか サツと余の身近ニ  
寄り 單純化と塊といふことを説明して  
呉れると同時に余のパレット、筆を取り訂正し  
て呉れた 臑げながら大自然の写生はこう  
するものかと 頷いた。

---

(改頁 43)

年末まで熱心に塾へ通つたり近郊へ写  
生に出かけたりして 田舎から持來した五百  
弗余りの金は殆んど使ひ果して 終つた

大正二年 シヤトル市滞在

タダマ画塾の 塾頭タダマ師は ボルネオ生れ  
だと云ふ 父君が蘭館南ボルネオの領事を  
して居つた頃生れたのだといふ 和蘭本國に  
て青年期を過しアムステルダム美校出身<sup>(33)</sup>  
カット・ワークビーチに立派な画室を構へて  
制作したものは殆んど 英國へ向け輸出され

(33) フォッコ・タダマは、清水の日記によればボル  
ネオ生まれとのことだが、スマトラ島南東部のパレン  
バンという説がある(杉村)。また、ancestry.com の  
Message Board には以下のような記述があつた。父ラ  
イニエル・ヴィレム・タダマはオランダ東インド会社  
に勤めてインドネシアへ渡り、母親はインドネシアの  
現地の女性だった。一九〇九年に妻とシアトルに渡つ

てきたタダマは一九三七年に亡くなるまでこの地に住む。<http://boards.ancestry.com/surnames.tadama/1.3/mb.ashx> (2018年12月17日最終確認) なお、シアトル・デイリー・タイムスの記事によると、彼の死因は自殺だった。“SEATTLE ARTIST KILLS HIMSELF”, *The Seattle Daily Times*, May 24, 1937, p.17.

---

(改頁 44)

制作の傍ら獵が好きだったので獵犬も  
英國から幾匹か取り寄せ 気儘な生活を  
續けてゐる内ニ 絵は賣れなくなり愛妻に  
は粘○病に冒され 煩悶の日が續くやうになつ  
てからは アメリカへ渡り 一稼ぎしやうと廻り  
廻つて 遂ニアメリカ西海岸の此處まで落ち  
延びて来たらしい 和蘭人といふより独逸人と  
いふ風貌を供へて居り 立派な面構への  
四十前後である FoKKo. Tadamaが本名  
である.

---

(改頁 45)

三月中旬日本人倶楽部ニ於て講演したブーカー、  
ワシントン氏<sup>(34)</sup>は 黒人であるが 米國第一の雄弁家  
といふ 今どう云ふことを演説したか記憶ニ残つ  
てゐないが 語氣、態度など はつきり思ひ出  
せる。 此頃 埼玉懸出身の田中保氏<sup>(35)</sup>、和歌  
山懸出身の大石七分氏<sup>(36)</sup> 福島懸出身の宍戸  
○行氏を識つて往復したものである  
生活費なども安い時で 学校の月謝材料費  
食費など払つても三十弗 前後でやつて行けた

(34) ブッカー・タリフェーロ・ワシントン (Booker Taliaferro Washington, 1856-1915)、アメリカ合衆国の教育者、作家。

(35) 田中保 (1886~1941)、埼玉県岩槻町 (現在のさいたま市岩槻) 生まれの画家。パリにて病没。

(36) 西村伊作の弟、大石七分 (1890~1959) か。七分は画家、建築家。佐藤春夫の小説『F O U』のモデルともなった人物。

---

(改頁 46)

ものだ しかし日本街を離れて白人間と生活  
したら この幾倍なればやつて行けない  
日本人の聖堂する食堂では普通十仙 二十仙  
も出せば相当な御馳走を口にすることが出来  
た。 弁当、(サンドウイッチ) 紙の袋へ ハム、鶏卵

を挟んだパン二個の外 林檎一個パイ一片  
が包まれて十五仙であつた。

五月末 阿部君と一緒にキヤスケード山麓へ  
写生に出かけた 若芽の頃で ゴールド、バー<sup>(37)</sup>  
附近は殊に美しかつたことを思ひ出す

(37) ワシントン州スノホミッシュ郡ゴールド・バー (Gold Bar)。

---

(改頁 47)

夏になると学生は大体郊外へ働き\に／出かけて  
心身を鍛練する傍ら学資を稼ぐことに  
なつてゐる、日本人は無論であるが白人間  
でも そうすること●に一向賤いことなど、考  
へる者はない

余もアラスカ行きを勧められ 六月七日午後  
九時シヤトル港を出航した。

アラスカは夏冷しく大体四ヶ月の労働期であ  
る 鮭の罐詰工場が職場だ。

相当古くから支那人が大会社から下受

---

(改頁 48)

けをして日支両國人の労働者を狩り集め  
ては夏期 アラスカへ往復してゐたものである  
最近までは アラスカ行きといへば 大体人ニ■対■(丸  
で囲み)

相手にされぬやくざ者とされてゐたが次第に  
真面目な学生が出かけるやうになつてから  
は往復の船中や上陸してキャンプの中で  
人殺しや物凄い喧嘩など見られなくなつ  
た

---

(改頁 49)

このアラスカ行一團は二十名計りで 日支両國人半々  
日本人の世話係は仙台出身の高橋樓州といふ  
体格の立派な温厚な男で 五十歳前後で  
ある

七日午後九時シヤトルを出帆した船は十日午前  
四時 ケチキャン<sup>(38)</sup>へ着いた 此辺まで来ると  
雪線が大分●低くなるらしく 港町の裏に  
ある小高い山には雪が解けずに残って  
ゐる

午後二時頃 ランゲル港<sup>(39)</sup>へ寄る

(38) アラスカ州ケチカン・ゲートウェイ郡ケチカン

(Ketchikan)。

(39) アラスカ州市郡ランゲル (City and Borough of Wrangell)。

---

(改頁 50)

翌十一日 明け方 トレットウエル着 ドグラス<sup>(40)</sup>を至て デューノー港<sup>(41)</sup>へ入った 真白く雪の積つてゐる 連山は エメラルド・グリーンの 影を海面に 写して 偉麗な光景を呈してゐる  
十二日 午前三時 アラスカ瀬戸内のどんずまり スガゴイ港<sup>(42)</sup>へ着いた 船中安眠出来ぬ為め ふら／＼してゐるので上陸を見合はして舷の甲板から 外界を眺めて満足した  
三角形の雪山が両側から迫りこの古

(40) ダグラス (Douglas) ジュノー近郊の地名。

(41) アラスカ州ジュノー市郡 (City and Borough of Juneau)。

(42) アラスカ州スカグウェイ郡自治市スカグウェイ (Municipality of Skagway Borough)。

---

(改頁 51)

びた小さな港町を抱いてゐる  
十三日 愈々目的地 ケーキ港<sup>(43)</sup>へ着くことが出来た 夏だいふに中秋頃の冷しさである 午前二時頃写生することが出来■た■ (右脇に書込) 程  
暗い時間が短いのに先づ驚いた。  
工場の附近には 粗末なインディアンの住家が多く 鮭の燻製を作つて年がら年中 メリケンコと一緒に食膳を飾つてゐる由。

(43) アラスカ州プリンス・オブ・ウェールズ＝ハイダー国勢調査地域 (現) の街ケイク Kake か。同地の缶詰工場 (Kake Cannery) は1997年にアメリカ合衆国国定歴史的建造物に指定されている。

---

(改頁 52)

或日 この部落へ出かけて見たら 熊の皮を剥いてゐるのに逢つた 面白い場面だつたので早速 持來した写生帖へ収めやうとしたら 描かれると直ぐ死んで終ふから厭やだと拒絶された 日本でも維新当時写真をパテレンだとして排斥したことがあつたなど

思ひ出す

支那人は 熊の掌を非常に喜ぶ  
何時の間にかその掌が支那人小屋の日當りのよいところへ吊された。

---

(改頁 53)

賭博をやりたさに毎年アラスカへ往復する男が或朝 海岸で打ち殺したといふ鹿を担ぎ込んで馳走二なつたが美味であつた 鹿は早朝水際へ草を食べに集つて來るのだといふ。  
夕食が済むと食卓は賭博台に代つて徹宵 カードや銭の雑音と喧嘩腰の大声が耳の近くを去らない

---

(改頁 54)

支那人側の方でもシーコーといふ單純な賭博が毎夜續けられる 勝つても負けでも結局は堂元に銭が集められて終ふ 一夜にして四ヶ月分の給料を失ふ者も少なくない こういふ連中は働くのが如何にも馬鹿臭いに違いない 監督の目を盗んでは工場内の人目に触れないところで 足を延ばしたり 居眠り／＼など／＼をしたりして夕刻／＼解放される時間／＼の來るを待つ ことにしてゐる

---

(改頁 55)

鮭の罐詰めは順序よく毎日箱詰めニされて埠頭へ運ばれる 大体三種類の鮭が分類されて それ／＼始末され シルバーサモンといふ大型の鱗が銀色に光つてゐる鮭は切肉にされず その儘大樽へ塩漬にされて出荷される この鮭が一番美味である こうして過去四ヶ月間働いて若干の給料を得て十月三日出帆してケーキ港に別れた 途中高橋氏が船中病死した

---

(改頁 56)

帰沙すると直ちに画塾に通ひ出して懸命に勉強した

大正三年 シアトル市在住  
この年の三月初旬 塾内に於て生徒作品



展覧会が催された 総点数 百三十七  
余の出品は油絵二十四点 デッサン（木炭、  
パステル。 コンテ）二十三点計四十七点<sup>(44)</sup>

(44) この年の3月15日付の新聞記事に、「Thirty-One Artists of North-west」という展覧会の紹介が載っており、「この展覧会の目玉」として「S. Haguida, Y. Tanaka, T. Shimizu and T. Nakagawa」の四人が挙げられている。T. Shimizuは清水登之か。ART EXHIBIT TO OPEN TOMORROW, *The Seattle Sunday Times*, March 15, 1914, p.26.

---  
(改頁 57)  
初めて余の作品が公衆に接した喜びは  
押へきれない程であつた。  
ワツパトの高木氏<sup>(45)</sup>に長男が生れ人手不足だ  
といふ通知に接したので 早速加勢に出  
けた 洗濯物を集めたり マークしたり 洗つたり  
干したり アイロンを掛けたりして妻君の健  
康回復を待ち三月下旬から五月中旬まで  
懸命になつて旧友を助けた。

(45) 22頁に登場する「福島縣石城郡渡辺村出身の高木吉郎氏」。この時点でワパトの洗濯屋を経営していたと思われる。

---  
(改頁 58)  
歸沙したら 画塾は上町の静かなところ  
へ移されてゐた<sup>(46)</sup> まだ移ったばかりで  
これから画室に改造するには容易でよい  
余は報恩の積りで毎日出かけて先生の手  
傳をした 先生は又余の應援に酬ゆる  
積りでは 今後 月謝は要らぬからといふ  
それから十日間ばかり画塾が開かれ 山成  
弘禅君も是非通塾したいと紹介したもので  
ある

(46) F. Tadama Art School, 1811 Twenty-third Ave. / Instruction in Drawing and Painting, Phone East 4077. *The Seattle Sunday Times*, May 2, 1915, p.61. ちなみに2年前のモデル募集広告(*The Seattle Sunday Times*, November 9, 1913, p.65.)では、住所は1416 7th Ave.

---  
(改頁 59)  
山成君は早稲田出身の文学士で世間離れのした珍しい男である岡山縣出身で後紐育へ出てからも永長交際を續けた 無奇用な男だが熱心に勉強した  
此年桑港にアラスカユーコン博覧会<sup>(47)</sup>が開催され ワシントン州から在住画家の作品を選抜して送ることになった 余は三十號大の ピクニック 二十號大の丘 二点入選する

(47) アラスカユーコン太平洋博覧会 (Alaska Yukon Pacific Exposition Seattle) は1909年6月1日～10月16日まで太平洋地域の商業貿易の活性化を目的に開催された。またサンフランシスコでこの頃行われた博覧会はPanama Pacific International Exposition, 1915. である。いずれにしても年が合わない。(河野)

---  
(改頁 60)  
ことが出来た 十五号大の風景は オノラブル・メンション<sup>(48)</sup>になった  
十二月一日よりシアトル美術館内へ個展を開いた 出品数二十二点<sup>(49)</sup>

大正四年 シアトル市及び小蒸汽船内  
昨年末から約二ヶ月間美術館内へ晒した  
作品を メーン・ストツリートのメーンホテルへ持ち  
歸へり保管して貰った

(48) 選外佳作 (Honorable Mention)。入選作品に次ぐ賞。  
(49) なお、同年11月30日付の新聞記事には、「ワシントン州美術協会のギャラリー」で「明日」協会主催のレセプションが開催されるという内容で、「他の興味深い見所は、地元の画家T. Shimizuによる20点のカンヴァスの展示である」と記述がある。清水のいう個展とはこのことか。PUBLIC RECEPTION BY STATE ART ASSOCIATION, *The Seattle Daily Times*, November 30, 1914, p.4.

---  
(改頁 61)  
タビマ師は ブロードウェー・ハイスクールの夜間部  
絵画部の教授を兼ねることになったので  
塾生は 月謝を必要としないこの夜間部  
へ通ふやうになつた。  
三月初めから先生の助手となり 商品陳  
列所の壁面九枚を描く 三ヶ月かゝつて

完成した

八月初めから一ヶ月の契約にて近海岸 フライデー、ハーボアー<sup>(50)</sup>の罐詰會社へ働きに出かけた。此度はアラスカ行きと異り殆んど学生群

(50) ワシントン州サンフアン島の港町フライデー・ハーバー (Friday Harbor)。

---

(改頁 62)

だつたので愉快に仕事することが出来た。この罐詰會社から解放されて沙市へ帰つてから塾へ通つたり写生ニ近郊へ出かけたりした  
十月中旬から二週間 パンテーヂ劇處横の建物内へ第二回画塾生作品展覽會が開催された<sup>(51)</sup> 余の作品は十九点陳列された十一月下旬 近海を往復する小蒸氣船ピュゼット号へ乗込み 台處を助けたり甲板を掃除したりする役についた

(51) TADAMA ART SCHOOL TO EXHIBIT ITS PRODUCTS (311 University Street, Oct. 17-31), *The Seattle Daily Times*, Oct. 15, 1916, p.3.

---

(改頁 63)

それまで少し不健康ニなつた心身が極月末頃ニなつて恢復した。

大正五年 シアトル市及び舷に住む  
五月二十三日より先生と一緒にアレーナ内を画室として制作を初めた メトロポリタン劇■キ■ (右脇に書込) 場の背景。プレス倶楽部の壁畫等  
殆んど無休制作ニ没頭した  
十月一日より一週間 日本人街メーン、ストリート第五街角の空家を借りて在留同胞美

---

(改頁 64)

術家第一回展覽會を開催した<sup>(52)</sup> が出品者は極めて少数 田中、中川、野村 余と四名丈けである 阿部 山成 萩生田 諸君は東に南に 遠く別れてしまつたからである  
十月廿六日 全じ船かポータウンセントへ往復するやうになつたので又乗込んだ  
全月末日より ワシントン・アーツ・ミュージアム

ニ於て水彩畫家フォークナー氏と一緒に協同展を約一ヶ月間開催した<sup>(53)</sup>

(52) 同年10月1日付の新聞記事には、この展覽會の出品者は「Yasushi Tanaka, Tosi Shimizu, Azo Nakagawa and K. Nomura.」とある。JAPANESE ARTISTS TO EXHIBIT ART DRAWINGS, *The Seattle Sunday Times*, Oct. 1, 1916, p.8.

(53) 同月、ワシントン州美術協會 (Washington State Art Association) のギャラリーで開催されたタダマとアシュフォードという画家の展覽會に、清水の作品が1点出品されていた可能性がある。Local Art Exhibit is Well Attended, *The Seattle Sunday Times*, Oct. 15, 1916, p.57.

---

(改頁 65)

大正六年  
春紐育へ出發する迄 船乗生活を續けた。  
船乗生活中何時迄も記憶に残る事件は  
或る暴風の折 夫妻の乗った小舟を救助した時の光景である。  
暴れ狂ふ怒濤の中へ救助船を出したが  
進んで乗込む船員が居ない そこでこの光景を眺めてゐた料理番の助手九州生れの勇敢な男が 早速飛び乗って救助に當つた

---

(改頁 66)

救助の法方が悪かつたため妻が、遂に／死亡して終つた。勇敢な男は郵船会社の船乗りだつたので こう云ふ場合にはよく訓されゐたのである 記憶からこの場面を四号大に描いてこの万さんと呼ばれた勇敢な男へ贈つた

---

(改頁 67)

(記載なし)

(表紙裏)

(清水登之日記 略誌 了)

(いとう よしゆき)